民族観光の産業化と地元民の対応

——広西三江トン族・程陽景区の事例から——

兼重　努

はじめに

一九七八年以降の改革開放政策の進展に伴う市場経済振興により、中国には大きな変化の波が押し寄せている。それは都市のみならず農村にも波及している。そうしたなか、農村部の経済振興の一翼を担うものとして近年注目されるようになってきているのが観光開発である。

中国の場合、観光開発は、経済的な後進地域における貧困問題を解決する目的で立案・施行されることが多い。とりわけそれは少数民族地区にとって有力な地域開発の手段と位置づけられている［曽　一九九八：四四］。

少数民族を観光の対象とする民族観光は、既存の少数民族の居住地をそのまま観光地として開発する場合と、彼らの居住地とは別の場所に人工的にテーマパークを開設する場合の二つに大別することができる。

本稿は前者に限定して論じる。前者においては、そこに居住する人たちの伝統文化や民族文化、あるいは彼ら自身や日常の生活空間そのものが、観光の対象となりうる。そのため、観光開発が大規模に進む場合、地元の人々は多大な影響を被ることになる。

中国大陸において少数民族を対象とした観光は一九八〇年代初期から始まったと考えられる。先発組の代表格である雲南省のシーサンパンナのタイ族や大理のペー族や麗江のナシ族観光のように、少なくとも一九八〇年代末には民族観光地としてすでに著名になっていた場合もあるし、こ

こ数年のあいだに新たにたちあがってきたばかりの場合もある。先発組と後発組のあいだには観光開発の深度において大きなギャップがある。また、いったん観光の対象となると、間髪いれずに観光産業というかたちでの整備・組織化・制度化が進む場合もあるし、本稿でとりあげる程陽景区（景区とは景勝地という意味）の事例のように、そうでない場合もある。

ある土地やそこに住む人々が観光の対象とみなされ、実際にある程度の数の観光客が訪れる状態になることを、本稿では「観光化」と呼ぶことにしよう。また観光のために、道路網、交通機関や観光情報の組織的発信などのインフラが整備され、市場経済原理をもとに観光客から参観・入場料を徴収したり、政府や企業あるいは個人が、ホテル、レストラン、商店、旅行会社や観光プロジェクトなどの観光関連の事業を展開したりするようになることを、本稿では「観光の産業化」と呼ぶことにする。

少数民族が居住する集落は、まず観光化されたうえで、必要に応じて観光の産業化が進むというパターンが多いように見受けられる。近年、中国大陸では産業化された民族観光が目につくが、一九九〇年代前半の時点では中国の少数民族関連の観光地の多くが観光の産業化の段階にいたっていなかった。その時点では十数年後に少数民族観光がまさかここまで産業化されようとは、筆者を含めて多くの中国少数民族ウォッチャーには予想できないことであった。観光化と観光の産業化の両者は区別して考える必要がある。なぜなら、両者のあいだでは、地元の人々が被る影響がその程度、質ともに大きく異なると考えられるからである。

中国においては観光開発が脱貧困という目的で行われる以上、それが地元の人々に及ぼす経済的効果が強調されがちである。しかし、観光開発が地元の人々の文化や生活そのものに及ぼしている影響を考慮にいれることが重要である。観光がどれくらいの規模で、どういう形態で、どの程度制度化され、地元の人々に対してどのくらいの強制力を伴って行われるのか、また現地の少数民族の人々はいかなる影響を受けるのか、それにはさまざまなバリエーションがあると予想される。まずはそうしたことを考慮に入れて、個別事例を押さえることから始めなければならない。

観光化、観光の産業化の進行の度合いは国家の文化財政策、西部大開発、社会主義新農村政策、余暇にたいする政策などの発布によって刻々と変化している。民族観光の現状をよりよく理解するためには過去から現在までの変遷の過程を把握しておくことが必要である。そこで本稿では広西壮族自治区・三江侗族自治県の程陽景区を事例にとりあげ、まず民族観光の産業化がどのような過程をへて進行しているのかを通時的に押さえていくことからはじめる（表1）。次に、程陽景区の観光資源の核となっている木造

表1　三江県における観光関連の動向

年　月　日	事　　項
1978年	県旅遊局が成立する。
1982年2月23日	程陽橋が全国重点文物保護単位に指定される。
1986年11月30日	国務院が三江県を対外開放県として公布する。
1987年5月14日	亮寨橋、平寨鼓楼、亮寨鼓楼（以上林渓郷）、八闘大橋（八江郷）、岜団大橋（独峒郷）が、三江県の重点文物保護単位に指定される。
1988年	観光スポットを集中させるため普済橋を数百メートル下流へ移築する。
1992年	〈三江侗族自治県成立40周年〉　程陽橋の参観切符を製作。程陽橋の傍らにゲストハウスを建設し、県城に三江鼓楼、三江侗族博物館を建設する。
2000年	県旅遊局が『三江旅遊』（カラー小冊子）を作成し、表紙に程陽橋を用いる。
2000年12月18日	「三江侗族自治県程陽景区管理弁法」が公布される。
2001年6月25日	岜団大橋（独峒郷）が全国重点文物保護単位に指定される。
2002年	〈三江侗族自治県成立50周年〉　世界で最も高い鼓楼と銘打った三江鼓楼（27層、42.60m）を県城に建設する。
2003年10月	国慶黄金週にあわせ程陽橋付近で第1回旅遊文化節が開催される。
2006年5月25日	馬胖鼓楼（八江郷）が全国重点文物保護単位に指定される。同時に公布された「第一批国家級非物質文化遺産保護名録」に三江県関係ではトン族木構建築営造技芸、トン族大歌が含まれる。
2006年7月13日	程陽八寨が柳州市社会主義新農村建設の試験点に指定され、現地で起工式が行われる。
2007年春節黄金週 2007年五一黄金週 2007年国慶黄金週	「走進神奇的程陽八寨」春節旅遊活動が行われる。 五一黄金週三江県程陽景区活動が行われる。 程陽橋付近で第4回旅遊文化節が行われる。

出所：詳細は本文を参照。

公共建築物を事例に、民族観光の産業化が地元のトン族の人々に与える影響、および地元の人々の、観光客や観光開発を推進する側の国家や政府に対する対応の一端について、二〇〇七年一二月を下限とする現地における筆者のフィールドワークの成果をもとに、考察してみたい。

一　トン族観光地の創成

トン族＝侗族（トンズー）（Dong zu）とは漢語による他称であり、自称はカムあるいはチャムという。トン族はタイ系民族に属し、主に水稲耕作を営む。人口は二九六万人ほど（二〇〇〇年）である。トン族の人口の大部分は農村に居住している。彼らの居住地は主に西南中国の貴州省（トン族人口約一六三万人）、湖南省（約八四万人）、広西壮族自治区（約三〇万人）の境界地域である。

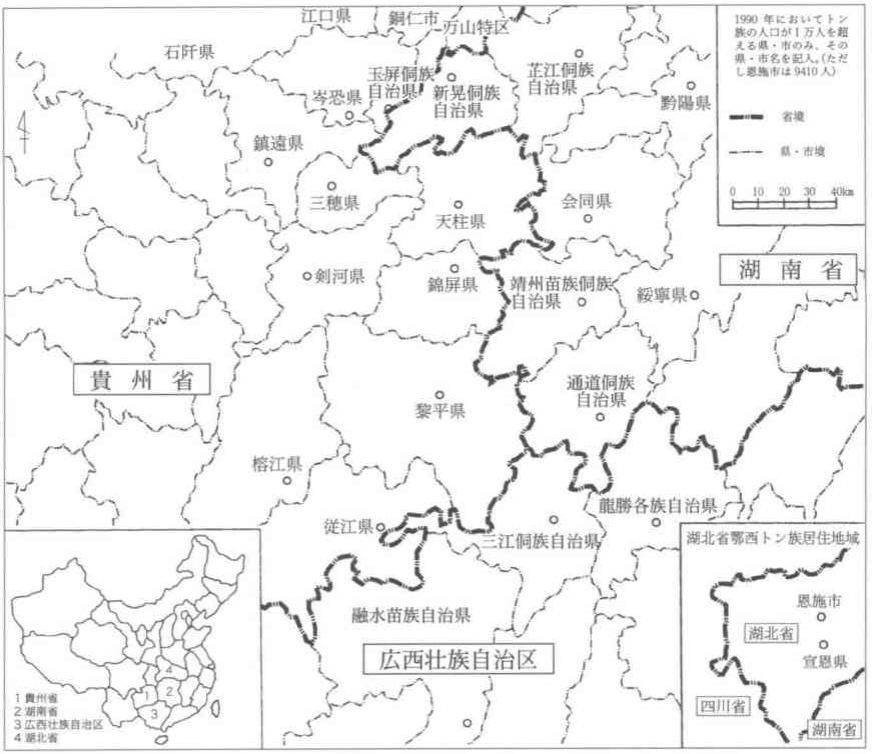
トン族は副業として山に広葉杉（コウヨウザン）を植える。その木を使って高床式住居を建て、鼓楼（集落に建てられている集会所、多くは塔状の建築様式をもつ）、風雨橋（屋根つきの木造橋）、村門、劇の舞台、涼亭（休息のための東屋）などの木造公共建築物を建設することで著名である。なかでも観光資源として著名なのは、鼓楼、風雨橋である。

現在トン族居住地域に開かれた観光地は数多く存在するが、それらのなかで比較的早い時期に観光地となったのは広西の三江侗族自治県の程陽一帯と貴州省黎平県の肇興、そして従江県の高増である。

ある場所が観光の対象となるためには、そこに観光資源が存在すると外部の人々によって認定されなければならない。程陽近辺は自然景観が特に優れているわけではない。歴史的に著名な地であるわけでもない。それでは、数あるトン族居住地のなかでなぜ程陽が観光地として選ばれたのだろうか。また観光資源として程陽の何が選ばれたのだろうか。これら二点についておさえることから始めよう。

程陽は林渓郷の最南端に属し、三江県の県城から約二〇キロ、車で約三〇分ほどの距離である。林渓郷はその人口の九割以上がトン族で占められている。郷内は南北に林渓川が流れており、その両側に多くのトン族の村々が点在し、各集落には鼓楼や劇の舞台が建てられ、集落の近くには大型の風雨橋がいくつか架かっている。林渓郷内の最南端、林渓川岸に位置する馬鞍集落の少し下手に程陽橋という中華民国期初頭に建造され、後に二回建て直された風雨橋が架かっている。

程陽一帯の観光の「売り」は第一に程陽橋を代表とする木造の公共建築物群である。程陽橋一帯が観光地となった経緯を理解するためには、程陽橋が広西壮族自治区クラスの文化財五六件のうちのひとつに選ばれた、一九六三年にまでさかのぼる必要がある。だが、それでただちに程陽橋



トン族居住地域

が観光の対象となったわけではなかったようである。その後、一九六五年からの四清運動、一九六六年からの文化大革命期に「封建迷信」「四旧」として鼓楼・風雨橋は批判された。しかし、改革開放政策施行の後、一転して文化財とみなされ、再び正の評価を与えられた。一九八二年に程陽橋は広西壮族自治区の重点文物保護単位（重要保護文化財）から全国重点文物保護単位へと昇格した［兼重 一九九八：一四〇、二〇〇五b：一六―一七］。このことは程陽橋が、価値ある文化財としての国家による「お墨付き」を得たことを意味する。

当時、全国重点文物保護単位に指定されていた文化財は全国でもわずか二四二件であった。[1] 広西では七件しかなかった。少数民族関係のものは非常に少なかった［彭・劉ほか編 一九八九：四四二―四五〇］。そのなかに程陽橋が入ったこと自体にたいへんな意義がある。一九八二年の時点でトン族に関係する全国重点文物保護単位は程陽橋が唯一であったため、[2] 程陽橋は数あるトン族の風雨橋のなかで他を圧倒して、最も有名でステイタスの高いものとなった。そして三江侗族自治県のトン族や広西壮族

自治区のトン族のみならず、貴州、湖南、広西のトン族全体を代表する文化財という位置づけをえた［兼重 一九九八：一四〇］。程陽一帯がのちに他のトン族居住県にさきがけて観光の対象となった素地はここにある。

著名な文化財となった程陽橋は、のちに起こってくる三江県の観光開発の動きのなかですぐに観光資源へと転換する。国家級の重要保護文化財である程陽橋は観光資源としても別格に扱われる。三江県における観光の最大の目玉となったし、今でもそうである。三江県を訪れる観光客で程陽橋に足を運ばない人はいないと思われる。

当初、程陽橋に次ぐ位置づけをされていたのが、程陽橋と同じ一九六三年に自治区の重要保護文化財に指定された馬胖鼓楼であった。三江県政府は自県の観光化をたちあげるに有利な、程陽風雨橋、馬胖鼓楼という著名な文化財を擁していたのである。三江県の当初の観光資源は木造公共建築物という物質文化とそれらが織り成す人文景観であった。

これから三江県の観光化、観光の産業化の歩みの概略を記述していく。その際、以下の四つの時期に区分するのが適切であると考える。すなわち、第一期：一九七九年から一九九一年、第二期：一九九二年から一九九八年、第三期：一九九九年から二〇〇一年、第四期：二〇〇二年以降である。

二　第一期――一九七八年から一九九一年――

三江県が観光の対象とみなされるようになったのは改革開放政策施行以降と考えられる。三江県では一九七八年に県旅遊局が成立し、観光客の正式な受け入れが始まった［王四西主編 一九九二：七三］。あとから述べるように、これはあくまで観光化であって、観光の産業化ではなかった。

三江県が正式に国外からの観光客を受け入れることができるようになったのは、一九八六年一一月三〇日に三江県が対外開放県（外国人が特別な手続きなしに旅行できる県）となってからである。三江県の対外開放は広西壮族自治区のなかでは異例に早い時期に実現した[3]。また貴州省や湖南省のトン族居住県に比べても早いものであった。三江県が早期に対外開放できた要因は程陽橋の観光資源としての価値が、当時において中国国内で公認されていたからだといってよいであろう。

三江県が対外開放県に指定された半年後の一九八七年五月一四日に、三江県内の亮寨橋、平寨鼓楼、亮寨鼓楼（以上、林溪郷）、八闘大橋（八江郷）、邑団大橋（独峒郷）が、県クラスの重点文物保護単位に新たに指定された。そのうち、平寨鼓楼は程陽橋から至近距離にある。この背景

には文化財の新たな指定によって観光資源を増やそうという三江県の思惑があったという可能性も想定できよう。

当時、程陽橋付近に観光スポットを集中させようという行政側の意図が存在した。一九八八年、程陽大寨の集落より数百メートル上流に架かっていた風雨橋（普済橋という）を改築する際、政府が三万元を補助し、県文物管理所などが地元に働きかけて程陽大寨の集落の傍らへわざわざ移築させた。その目的は普済橋を程陽橋と合わせることによって旅遊風景区を作りだすことであった。[4]

筆者がはじめて程陽橋一帯を歩いたのは一九九〇年である。当時、程陽橋は観光地として外部から認知されてはいた。しかし、程陽付近はごく普通の鄙びたトン族農村であり、観光客向けの施設や観光客を相手に商売する人は皆無であった。当時はまだ切符売り場はなく、無料で参観できた。県城から程陽にいたるバスはきわめて不便で、一日に三往復しかなかった。またバイクタクシーなどもなく、程陽一帯の村々をまわるには徒歩が頼りであった。程陽には宿泊施設はないし、飲食店や土産物屋なども皆無であった。当時、程陽は観光化されてはいたが、観光の産業化にはまだいたっていなかったのである。また県城にある旅遊局を訪れても観光関係のパンフレットといえば、手書き原稿を白黒コピーした素朴なものであった。

一九九一年末の時点では三江県には二本の観光ルートが存在していた。ひとつは県城から林渓郷にいたり、程陽橋、程陽八寨のトン族鼓楼、木造建築群を参観し、民間文芸パフォーマンスをみるもの。もうひとつは独峒郷へ行き、三江県内で最も早く建設された岜団風雨橋をみてから苗江両岸の鼓楼、風雨橋建築群をみるものであった［王四西主編 一九九二：七三］。馬胖鼓楼が観光コースのなかに入っていなかったのは、馬胖鼓楼が存在する八江郷自体が大型の風雨橋の数に恵まれておらず、複数の大型風雨橋を集中的にもつ林渓郷と独峒郷に比べると観光資源としての迫力に欠けると判断されたからだと考えられる。当時の程陽観光はトン族の木造公共建築物が主体でそれに民族芸能の鑑賞が加えられた程度のものであった。

第一期においては三江県を訪れる観光客の数は国外、国内ともに多くなかった。外国人観光客の数を三江県公安局出入境管理課によるデータでみると、対外開放の翌年の一九八七年にはアメリカ、イギリス、日本、ドイツなど少数の先進国からあわせて一一〇人[5]［侯 一九九六：四三］にすぎなかった。一九七八年から一九九一年の一三年のあいだに三江県旅遊サービス部門が接待した外国人はアメリカ、イギリス、日本、タイ、オーストラリア、香港、マカオ、台湾など二三の国家と地域からの、延べ二三〇八人であった。また国内の旅遊団体は一五団体二九八人であった。また県旅遊サービス部門が組織あるいは接待した広西

壮族自治区内外からの観光客は延べ二万人余りであった[王四西主編 一九九二：七三]。

三　第二期――一九九二年から一九九八年――

程陽橋観光が産業化へとむかう転機になったのは一九九二年である。この年は三江侗族自治県成立四十周年にあたり、国からまとまった資金が三江県に投入された。それをもとに三江県は、県内のインフラ整備を進めた。それは観光方面にも及び、県城に三江トン族博物館と三江鼓楼が建設された。これらの建設にあたっては、県文物管理所の幹部が尽力した。従来観光資源をもたなかった県城に新たにそれを造るという意図もあった。

一方、同年、県旅遊局や県文化局が程陽橋付近にトン族の民家の建築様式をもつゲストハウスを建設した。はじめて公式な程陽橋の参観券を製作したのもこの年である。カラー印刷されたこの参観券は、程陽橋のたもとで売られるようになった。程陽橋が観光客から参観料を徴収するようになったのはそれより少し前頃からだと思われるが、一九九二年までは正規の参観券はなかったのである。

こうした努力が実を結んだのか、観光を目的として三江県へやってくる国内観光客は一九九三年から増大した。しかし、当時の程陽観光とは程陽橋あるいは周辺のその他の木造公共建築物をみるのが一般的であり、一部の人々は別途に料金を支払って歌と踊りのショーをみる場合もあるが、いずれも短時間滞在しただけで、そのまま帰ってしまうのが普通であった。橋の付近に宿はできたものの、ここで宿泊しようという観光客はほとんどいなかったように見受けられた。

一九九七年には県城から程陽橋にいたる自動車道路がようやく舗装された。観光関連のインフラ整備が進むのがこのように遅かったことは、国家指定の貧困県である三江県にとって資金の調達が困難であったことを如実に示すものである。第二期は観光の産業化に向かって動きだしたものの萌芽状態にとどまっていたといえるだろう。

四　第三期――一九九九年から二〇〇一年――

一九九九年から二〇〇一年にかけての時期は程陽における観光の産業化の本格的な始動期と考えられる。一九九九年の国慶節から中国版ゴールデン・ウィーク（「黄金週」）が始まった。これ以降、中国の「黄金週」は春節、「五一」（労働節、メーデー）、国慶節の年三回、各七日とされた。これによって中国人の国内観光旅行者数が増大する。一九九九年を境に三江県を訪れる国内観光客の数が飛躍的に増加しているのも、黄金週の影響によると考えられる。

表2　三江県の観光客数の変遷

年	国内観光客数	国外観光客数	合　計	備　　考
1987	—	110	—	1)
1988	—	—	—	
1989	—	—	—	
1990	1,400	600	2,000	
1991	2,800	700	3,500	
1992	4,200	800	5,000	三江侗族自治県成立40周年
1993	15,200	1,000	16,200	
1994	17,800	1,300	19,100	
1995	23,700	1,500	25,200	5月1日から完全週休二日制導入
1996	13,100	600	13,700	三江県、大洪水被災 2)
1997	14,100	2,200	16,300	アジア金融危機 2)
1998	11,000	2,100	13,100	アジア金融危機 2)
1999	58,800	3,000	61,800	この年の国慶節から「黄金週」創設
2000	79,500	12,500	92,000	
2001	132,800	15,000	147,800	
2002	177,000	16,000	193,000	三江侗族自治県成立50周年
2003	—	—	—	
2004	—	—	—	
2005	—	—	220,000	3)
2006	200,000	30,000	230,000	4)
2007	179,000	16,300	185,300	上半期のみの統計 5)

注：国外観光客数には香港、マカオ、台湾からの観光客を含む［侯 1996］。
出所：1）［侯 1996］
2）［三江侗族自治県旅遊局 2002：43］
3）［諶・梁 2006］
4）［楊・孟 2007］
5）http://cyq.gov.cn/html/200771716813-1.html（2007年12月取得）
その他の観光客数は［潘 2005：29］による。

一方、三江県を訪れる外国人観光客の数も二〇〇〇年を境に急増してきている（表2）。

また二〇〇〇年後半からは西部大開発計画に広西も加えられた。三江県政府は「西部大開発、発揮三江五大優勢」という戦略構想を打ち出し、観光開発を重点項目の一つとして［三江侗族自治県旅遊局 二〇〇二：四四］、資金を投入しておおがかりな観光開発プロジェクトを実行に移し始めた。またインターネットやその他のメディアを利用して対外的な宣伝に力を入れ始めた。中国語に英語が併記された『三江旅遊』というカラー印刷の冊子も作成された。この時期の新たな動きは民族の節句における活動を三江県観光の「売り」のひとつにしようとし始めたことである［楊梅 二〇〇一］。先に述べたように、

程陽一帯の主要な観光資源はトン族の木造公共建築物である。しかし、それだけでは今後の観光産業のさらなる発展のためには不十分であると判断されたようである。

観光を産業化するために政府がとった具体的な政策についてさらにみていこう。この時期、三江県の観光開発は「景区」の開発を主体とするものとして立案され、観光の対象を程陽橋から「程陽景区」へと拡大する方針が定められた［楊梅 二〇〇一］。程陽橋とその周辺の村々は「程陽景区」という「景区」に包括されるようになった。観光の対象が程陽橋という点から面へとひろげられたのは、程陽橋という橋とその近辺で行われるパフォーマンスをみたらそのまま帰ってしまうという、当初の通過型のツーリズムからの脱却をはかろうとするねらいがあったためであろうと推測される。

ここで重要なのは、「程陽景区」の開発をすすめるにあたって、三江県人民政府は三五カ条からなる「三江侗族自治県程陽景区管理弁法」という条例を制定し、二〇〇〇年一二月八日に公布したことである。この条例において「程陽景区」の範囲は「程陽八寨」と定められた。程陽八寨に含まれるのは馬鞍寨、平寨、岩寨、平坦寨、程陽大寨、東寨、平鋪寨と吉昌寨の八つのトン族の村である（第二条）。景区の旅遊資源は名勝旧跡、民間建築、田園山林、公共施設と、トン族の音楽、舞踏、服飾、料理や飲み物、節句および生活習慣などと定義された（第三条）。この条例の施行によって観光客が参観料を支払う対象は程陽橋から程陽八寨に拡大された。

また管理のあり方も変化した。この条例が施行されるまでは、程陽橋を直接的に管理していたのは三江県の文化局であった。条例では景区の管理の主体を程陽景区管理委員会と定め、県旅遊局が先頭に立ち景区の観光業を正常に発展させること（第一八条）、景区の計画、建設と宣伝販売促進は県旅遊局が責任を負い、県文化局は文化財の保護と管理の責任を負うことと定めた（第一九条）。一方、程陽景区の経営は紆余曲折をへて、二〇〇六年以降、程陽橋景区旅遊開発有限責任公司があたっている［黄 二〇〇七：一一六―一一八］。

また程陽橋付近の景観を守るために景区内の村落を対象にセメントやレンガ造りの家屋の新築を禁止し（第七条）、既存のセメントやレンガ造りの家屋に対して景区の計画にそった改装を求める（第九条）など、地元の人々の日常生活に直接かかわる規制もこの条例に盛り込まれていた[6]。

一方、政府は景区を整備するために、資金を投入して程陽橋付近の河の整備や緑化を行った。また観光の内容を豊富にするために、景区のなかに「侗族工匠世家」（代々続くトン族の大工の家）などの観光スポットを整え、新たに「民俗風情表演」の一座を組織し、観光客の鑑賞に堪え、

観光客の参与性が極めて強いプログラムを新しく加えた［楊梅 二〇〇一］。「民俗風情表演」とは馬鞍鼓楼前の広場で馬鞍寨の二六名の男女が演じる歌と踊りのショーである。二〇〇一年当時は観光客の要望があれば演じられ、料金は一回当たり四〇〇元であった。このショーのなかには観光客が参加できるプログラムも用意された。

条例施行以前、二〇〇〇年三月の時点では参観料は五元であった。旅遊局の当時の副局長の話によると、そのうち三元は県文化局、二元が旅遊局の取り分となっていた。文化局はこの収入を文化財保護のための費用として使い、旅遊局は上述の『三江旅遊』の作成費用にあてた。一方、程陽橋のすぐ近くにある馬鞍鼓楼では国内観光客から〇・五元、外国人観光客から一元の参観料を独自に徴収し始めた。

なお、条例施行以後、二〇〇一年夏の時点では程陽景区の入場料は一〇元に値上げされていた。また旅遊局と文化局がそれぞれ経営する程陽橋の傍らのゲストハウスのほかに、この年、馬鞍寨には村民が経営する民宿が数軒オープンした。農家に外国人を含む観光客が宿泊できる体制ができたことは非常に重要である。なぜなら、現地のトン族農民が外国人を含む外来の観光客と直接交流する機会が増えたからである。

また、三江県は県内の独峒、八江、老堡、丹州などにも人文観光区、農業観光区と自然観光区を設けた［楊梅 二〇〇一］。三江県は県内に複数の景区を作るのみならず、グリーン・ツーリズムやエコ・ツーリズムなど観光の多様化を図ったのである。

この時期になると、三江県に限らず、トン族が多く居住する各県では新たな観光資源の立ち上げが始まる。最も顕著なのは、県ごとの鼓楼、風雨橋の建設競争である。各県政府は、屋根の層数が多く、より高い鼓楼の建設、より長い風雨橋の建設を競い始めた。例えば従来トン族のなかで最も高かった黎平県の義寨鼓楼（一一層、二五・八メートル）に対して、貴州省榕江県では二〇〇一年に三宝鼓楼（二一層、三五・一八メートル）を建設した。また風雨橋に関しては、従来最長であった三江県の程陽橋（七七メートル）に対して、北部方言区に属する湖南省芷江侗族自治県では一九九九年に世界最大の風雨橋、龍津橋（二五二メートル）を竣工した。これらの鼓楼・風雨橋は各県の政府が県の中心地や観光スポットに建設した、官製のものである。

五　第四期——二〇〇二年以降——

三江県はそうした他県の動きに敏感であった。三江県も他のトン族居住県を視野に入れた観光開発を行っていく。

三江侗族自治県では自治県成立五十周年を記念して、二〇〇二年に世界で最も高い鼓楼と銘打った三江鼓楼（二七層、四二・六〇メートル）を建設した。この新たな鼓楼には有料の展望台が設けられ、県城を眺望することができる。また鼓楼前には民族広場と名づけられた大きな広場が作られ、観光関連の大規模なイベントが開かれるようになった。この三江新鼓楼の完成により、従来、一九九二年建設の三江トン族博物館や旧三江鼓楼以外の観光資源に乏しかった県城に新たな観光スポットが設けられた。

トン族が居住する県のなかで、自県の観光開発に向けて近年最も積極的な動きみせているのが貴州省黎平県である。飛行場を誘致し、二〇〇五年一一月六日から開業にこぎつけ、悪かった交通のアクセスを改善することに成功した［李・楊 二〇〇五］。黎平県は近年来、自らの県を「侗郷之都」（トン族居住地域の都）と命名し、自県こそがトン族居住地域の中心地であるとアピールし始めた。一方、三江県は「桂林山水甲天下、侗族風情看三江」（桂林の山水は天下に甲たり、トン族風情をみるなら三江へ）をキャッチフレーズにしている。三江県は、国際的に著名な大観光地である桂林からわずか一六〇キロ余りしか離れていない。このキャッチフレーズには桂林を訪れた観光客に三江県にも足をのばしてもらいたいという、三江県政府の願いが込められていると解釈できよう。

各省や県のあいだの観光をめぐる競争は、国際的なお墨付きを得ようとする方向に拡大する。民族観光資源のブランド化競争は、中国の国内外で新たに実施されるようになった文化財政策とあいまって物質文化から無形文化にまで広範囲に行われている。そのきっかけになったのがユネスコの世界文化遺産や無形遺産への登録申請である。それに登録されることにより、自県のもつ民族文化資源を世界のブランドに高めようというのである。黎平県は、トン族大歌（合唱形式の歌、ただし黎平県独自のものではない）を無形遺産に申請しようと準備を進めた。広西壮族自治区では、世界遺産登録への申請を計画しており、二〇〇四年の時点では自治区内の三つの景区を選んで候補としていた。そのなかに程陽橋が含まれていたのだ［蒋 二〇〇四］。二〇〇七年現在、両者はともに登録されてはいないが、仮に登録されれば他県との差別化をはかることができ、観光客誘致において、おおいに有利となるという目算があると考えられる。

目下のところユネスコの無形遺産にトン族に関するものは一件も登録されていないが、中国の「国家級非物質文化遺産保護名録」（国家無形文化遺産保護名簿）にはいくつか登録されている。国務院が二〇〇六年五月に公布した「第一批国家級非物質文化遺産保護名録」にはトン族に関するものが六項目含まれた（表3）。指定を受けた県とそ

表3　「第一批国家級非物質文化遺産保護名録」（トン族関係のもの）

指定項目	類　別	地　区	申請した地区
トン族木構建築営造技芸	伝統手工芸	広西	広西壮族自治区柳州市、三江侗族自治県
トン族大歌	民間音楽	広西、貴州	貴州省黎平県
トン族琵琶歌	民間音楽	貴州	貴州省榕江県、黎平県
トン劇	伝統戯劇	貴州	貴州省黎平県
トン族薩瑪節	民俗	貴州	貴州省榕江県
儺劇・トン族儺劇	伝統戯劇	湖南	湖南省新晃侗族自治県[1]

注：1）異なる地方の異なる民族による複数の劇（武安儺劇、池州儺劇、トン族儺劇、沅陵辰州儺劇、徳江儺堂劇）が儺劇として一括指定された。
出所：中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館 http://www.ihchina.cn/（2007年12月取得）

うでない県の間で観光ブランドの差別化がこれから進むと予測される。

年三回の黄金週が中国において定着するにつれて、多くの観光地ではその時期にあわせて観光関連のイベントを開催し、観光客を引きつけようとし始めた。三江県も二〇〇三年一〇月の国慶黄金週から「程陽橋文化旅遊節」という観光イベントを創設した。またやや遅れて春節、五一の黄金週にもそれぞれ特別なイベントを開催するようになった。程陽景区の場合、平常はそこを訪れる観光客はそれほど多くない。年三回の黄金週にいかに多くの国内観光客を獲得するか、それは景区の経営においてきわめて重要なのである。

程陽景区における二〇〇七年の三つの黄金週イベントを簡単に紹介しよう[7]。春節黄金週には「走進神奇的程陽八寨」と題した二〇〇七年春節旅遊活動が、大晦日から正月六日にかけて七日間行われた。結婚に関する習俗と「花炮節」を中心にプログラムが組まれている。程陽一帯のトン族は旧正月の期間に集中的に結婚する。それを観光イベントにとりこんだのだ。具体的には、正月「初一」（一日）は新婦が集落の井戸で水汲みをする。「初二」（二日）には新郎の家で婚礼の宴会が行われる。「初三」（三日）には新婦が親戚らとともに列を組んで実家に戻り、実家で宴会が行われる。それらを観光客が見物したり、宴会に参加した

りするのである。花炮節は、火薬でうちあげた花炮とよばれる玉を周辺の村の若者たちが奪い合う行事であり、観光客はその様子を見物する。玉を獲得した男の村では、それを記念して村で宴会を行う。その宴会に観光客も参加するのである。以上は年中行事の観光イベント化といえよう。

五一黄金週のイベントは、馬鞍鼓楼前広場でふだんは午前と午後の一日二回行っているトン族の歌や芦笙、踊りのショーを軸に、それらの合間に餅つき、糸つむぎ、機織り、布の砧うちの実演、また夜にはトン族の民間芸能など若干の特別プログラムが加えられたものである。春節、国慶黄金週のイベントに比べるとプログラムの種類は少ない。ここで注目したいのはトン族の女性が日常行っている手作業である糸つむぎ、機織り、布の砧うちが、観光客向けに実演されていることである。こうしたものをわざわざ観光客のまえで演じてみせるように仕組んだことはきわめて重要である。なぜなら、伝統的な道具を使い、手仕事で行う糸つむぎ、機織などに関して、地元の人は遅れた習慣だと自虐的に語ることが多いからである［兼重 二〇〇五a：三四二］。

最もプログラムが多彩なのは「多耶（トゥオイエ）国慶節 程陽橋文化旅遊節」と銘打った国慶黄金週のイベントである。キャッチ・フレーズに使われた「多耶」とは、人々が手をつないで列や輪を作り、手や足を動かしながら、リードする一人の歌声に唱和する地元トン族の民間芸能のひとつである。これは二〇〇七年に第四回目を迎えた、三江県あげての観光イベントである。毎回三江県城と程陽景区の二か所を中心に行われてきたが、年によっては独峒郷（二〇〇四年）や良口郷の和里三王宮（二〇〇七年）などでもイベントが行われた。ここでは程陽景区に限定して紹介しよう。程陽景区ではトン族の民族芸能のほかに、結婚に関するイベントが設けられている。地元の文脈からするとこの時期の結婚関連行事は季節はずれなものである。国慶黄金週のイベントで特徴的なのは、五一黄金週よりもっと多くの地元の日常生活におけるさまざまの作業が観光イベント化されていることだ。例えば、養魚池の水ぬき、糸つむぎ、機織り、縄ない、石臼ひき、竹籠あみ、餅つきである。そして、それらの一部に観光客が参加できるように工夫されている。例えば、魚捕獲競争、石臼ひき競争、竹籠あみ競争などである。

また、かぼちゃ投げ合戦も観光イベント化されている。かぼちゃ投げ合戦は旧暦八月一五日に程陽付近のいくつかの村に限定して行われていた年中行事であるが、国慶黄金週のさいに観光客と地元の人々が一緒に行うものにアレンジされた。

これらの黄金週のイベントは、地元でその時期あるいは前後に行われる年中行事や日常生活の作業を観光資源とし

て活用するために、それを観光イベントにしたて、それらの一部に観光客が参加できるような工夫をこらしていることに特徴がある。ただし、この企画を立案したのは地元の村人ではないと考えられる。

年中行事の観光イベント化は地元の年中行事の日取りに影響を与えるようになっている。黄金週にあわせるために、地元の年中行事の日にちを動かす現象がみられる。例えば、程陽では従来旧暦の「正月初七」に花炮節が行われていたが、[8]それを二〇〇七年には二日前だおしして行うことにした。その要因はふたつ考えられる。ひとつには「初七」は黄金週の最終日にあたり、遠方からの観光客はすでに家路についてしまっているからである。もうひとつは地元の若者たちも多くが出稼ぎ先に戻ってしまっており、玉を奪い合う若い男たちの確保が難しくなるからである。

地元の年中行事を観光に利用しようという動きは最近さらに進んでいる。二〇〇七年一二月、程陽景区では「程陽八寨冬至節」という新たな観光イベントが創設された。これは、程陽八寨の楊姓住民が旧暦の一〇月末から一一月の初旬（西暦の一二月前後）にかけて行う、「冬節」という年中行事を観光イベント化したものである。冬節には、地元の楊姓の人々は祖先を祀り、各家でごちそうを作る。楊姓以外の老若男女は楊姓の人々の家を訪れてごちそうを食べ、男たちは酒を酌み交わして宴会を行う。観光客は楊姓の祖先祭祀の様子を参観するのみならず、食事や宴会にも参加できるというのが、このイベントの「売り」である。その他にも地元の人々による芸能の鑑賞などのプログラムも盛り込まれており、五日間行われた。

近年、三江県では程陽景区の上流の村々にも観光スポットを新設する方針で観光開発を進めるようになっている。一般に程陽橋への観光客は、三江県の県城である古宜を起点として林渓川を下流から上っていく。大部分の観光客は程陽橋とその近辺のいくつかの村を散策しただけで帰ってしまう。程陽八寨のうち、程陽橋から比較的遠い平坦、吉昌、坪鋪の各寨まで足をのばす観光客は少ない。さらに程陽八寨より上流の村々まで足をのばす観光客はごく少数である。先に述べたように、程陽は林渓川沿いのトン族居住エリアの最も下流に位置する。トン族の村々が数多く存在するのは程陽橋より上流なのである。これら上流の村々は永らく観光コースからは外れていた。

しかし二〇〇四年ごろから、程陽八寨より上流の村々にも徐々にではあるが観光コースが拡大されるようになってきた。それには行政側のお膳立てがあった。程陽橋から約六キロ上流に位置する冠小寨は、二〇〇四年一二月一日に三江侗族自治県の第一回「十佳生態文化村」（一〇のすぐれた生態文化村）に指定された。また「民俗風情接待点」にも指定され、二〇〇五年一〇月の国慶節から団体観光客

を迎えることができるように、村落空間を変えるプランが立てられた。大勢の観光客を迎えるには従来の鼓楼前の広場では手狭と判断され、政府が資金を投入し、もともと菜園だった集落の丘のうえに鼓楼と舞台を移築し、両者のあいだに大きな広場を造った。舞台と広場では観光客相手のパフォーマンスが行われるようになった。観光客向けのトイレやゴミ箱も新たに設置された。冠小寨観光の「売り」は、観光客をもてなす大宴会「百家宴」である。ホストとなる村の人々は家からテーブルを持ってきて広場に置く。それら数十のテーブルの上には、各家から持ち寄られたおこわ、おかず、そして酒が並べられる。こうした大規模な宴会に、近年、漢語で「百家宴」という名称がつけられ、観光客に向けて宣伝されるようになった。

以上の観光プランも地元の村人自らが立てたものではないと考えられる。冠小寨は観光業のために村の生活空間を変えてしまったのである。このことが及ぼした影響については、また後ほど触れることにしたい。

次に、三江県全体の観光状況に話題を移そう。現在、三江県には八つの景区が作られている。程陽景区、八江景区、孟江景区、県城景区、闘江景区、老堡景区、丹州景区、溶江景区である［三江侗族自治県国土資源局・三江侗族自治県地方誌弁公室編 二〇〇六：二一二］。これらの景区のうちいくつかをまとめて旅遊区にしようとする動きがでている。三江県は専門家に「三江侗族自治県旅遊発展総体規劃」と「程陽八寨保護与発展建設規劃」の作成を依頼した。その結果、県城を中心として、北部には「程陽橋侗族文化風情旅遊区」、西部には「孟江侗族生態博物館旅遊区」、南部には「融江夜郎文化及生態休閑旅遊区」、東部には「丹洲生態農業観光休閑旅遊区」と「高基生態漂流旅遊区」という構造が作られた。三江県は、程陽景区に「多耶程陽橋国際侗族文化旅遊節」という節句活動の核を作り、それに全県の一五の郷と鎮で行われるさまざまな節句の活動を組み合わせることによって、「多耶国慶節　程陽橋文化旅遊節」を近い将来には国際的な観光イベントに高めることも視野にいれて、節句を中心とした観光アイテムを創る計画である［三江 二〇〇七］。また、資金の調達のめどもついているようである。「三江侗族自治県旅遊発展総体規劃」では、総投資額一七億人民元、二〇一〇年にいたるまでに、県全体の景区が接待する観光客の数は延べ約五〇万人、観光収入は一億人民元近くが見込まれているという［楊・孟 二〇〇七］。

三江県は柳州市に所属する。そのため、三江県の観光事業は柳州市の観光主管部門によって、「風情柳州」観光発展計画のうちのひとつに組み込まれている［楊・孟 二〇〇七］。

以上みたように、第四期にいたって程陽観光は初期と比

べて観光圏の広域化と構造化、観光内容の多様化がはかられた。特に重要なのは、物質文化中心型から非物質文化重視型、鑑賞型から参与型、通過型から滞在型への変化である。

六　地元民の対応

以上、程陽景区が初期の観光化の段階から、観光の産業化の萌芽期をへて、本格的な始動期に向かっていく過程を粗描した。次に二つ目の課題に進もう。観光の産業化は地元の人々にどのような影響をもたらしているのであろうか。また地元民はどのように対応しているのであろうか。筆者が現地で行ったフィールドワークで得られたデータをもとに、これらの問いに答えてみたい。

まずは経済的な側面から述べてみよう。景区内では、観光客が最も多い程陽橋付近を中心に、観光客向けの食堂および商店、土産物屋が数軒開業している。土産物屋は無店舗のものが多い。これらは地元民が開いているものが多い。無店舗の土産物屋は程陽橋とその少し上流に架かっている合龍橋の中で数人のトン族の婦人たちが開いているもので、橋の通路の傍らに刺繍や民族衣装、袋物の類を並べて販売している。近年は個人営業のゲストハウスや民宿が数軒開業している。大部分は現地の人が開いているものであるが、二〇〇六年ごろ、外地から来た人が二軒のゲストハウスを開業した。地元民による経済活動の規模は一般に零細である。また彼らは観光関連の商売を行う資本とノウハウ、また外国語能力を持ちあわせていない場合が多い。

二〇〇七年九月の時点で程陽景区の入場料は大人三〇元、学生と子供一五元であった。この入場料を払えば、観光客は程陽景区内のどの鼓楼や風雨橋も無料で参観できることになっている。また切符売り場の横にある「侗家油茶嘗処」という看板のかかった木造の建物の中では、三〇元の参観券を提示すれば無料で、一五元の券の場合は別に一元を支払えば、トン族の油茶を二杯味わうことができる。油茶は甘い味と苦い味の二種類が用意されている。油茶とは、モチゴメをはじけさせたものなどに具を加え、植物油を配合した液体を注いで食べる食品である。さらに、毎日午前と午後の二回、馬鞍鼓楼前広場にて約三〇分間行われるトン族の民族風情表演を、無料で参観することができる。このショーを行っているのは程陽八寨の青年たちで、一人当たりの月給は五百元前後だという。景区のなかの観光関連の施設には地元の村人たちが雇用されている。地元民のなかで観光関連の施設に雇用されたり、観光客相手の商売をしたりしている人はごく少数である。

それ以外の大多数の村人にとって観光はどれくらいの収入をもたらしているのであろうか。現地で聞き取りを行っ

たところ、観光による収益が地元の人々に十分に還元されていないという不満の声を耳にした。程陽景区参観料収入の程陽八寨の人たちへの分配に問題があるようだ。複数の人々の話によると、二〇〇六年まで程陽八寨に参観料収入は分配されていなかった。それに対して地元の人々が意見した結果、二〇〇六年の景区入場料の売り上げの一部が、ようやく二〇〇七年八月に程陽八寨の各村に分配されることになったという。分配額は村ごとに異なり、また分配金の処理方法は各村の裁量に任された。東寨の場合は二〇〇〇元の分配金を得たが、村人には再分配せずに山へ行くための道路補修費用に充てた。馬鞍寨の場合は四八〇〇元の分配金を世帯単位で均等に再分配することにした。馬鞍寨には一七〇世帯あるため、一世帯当たりの分配額は二八・二元となり、皮肉なことに景区の大人の参観料三〇元にも満たなかった。

程陽景区における観光の産業化の流れに対する地元の人々の対応について、より詳しく検討を加えておこう。程陽景区の場合、程陽橋を中心とした木造の公共建築物が主要な観光資源である。そこで、木造公共建築物にかかわる事項に焦点を絞り、三つの事例を紹介する。

〔事例1〕 程陽橋の傍らにある馬鞍寨では、一九九七年ごろから観光客に馬鞍鼓楼修理のための寄付金を募り始めた。馬鞍鼓楼のなかの大柱には帳面が吊るされており、係りの村人（年配の男性）は鼓楼を参観する観光客に鼓楼修理のための寄付をよびかける。寄付は強制ではなく、あくまで任意である。できれば一人当たり一〇元以上の寄付を、とよびかけている。寄付してくれた観光客には、氏名、居住地（外国人の場合は国名）と寄付金額をその帳面に書いてもらう。後にその帳面に書かれた事項を石碑に刻み、鼓楼の内外に据えるというのである。鼓楼内外にはすでに十数枚の石碑が設置されている。また、合龍橋と普済橋という風雨橋においては、一〇元以上寄付した場合には寄付者の氏名、居住地、寄付金額を石碑に刻み、一〇元未満の場合は木の板に書くというように、寄付額の多寡に応じて扱いに差をつけている。これは一人当たりの寄付金額を増やすための工夫である。

最初は馬鞍鼓楼のみで行われていた観光客への募金活動は、程陽八寨の風雨橋と鼓楼の大部分に波及し、現在にいたっている。また外国人観光客もターゲットにされており、募金の呼びかけの文言が中国語だけでなく英文で書かれている場合も多い。国内観光客の名前に混じって欧米からの観光客の寄付者の名前が横文字で刻まれている。

本来地元では、風雨橋や鼓楼の建設や修理に対する寄付には、功徳を積むという意味、あるいは村と村のあいだで協力しあうことにより互いの友好関係を構築するという意

味がある［兼重 二〇〇〇：二〇三―二一一］。一般に地元の人々を対象とした募金活動は期間限定で行われる。しかし、観光客に対する募金活動の最も顕著な特徴は、鼓楼や風雨橋に一人あるいは二人の係員の村人が詰めており、恒常的に行われていることである。寄付額のうち二割は報酬（手間賃）として係員に分配されている。このことは、特に尋ねない限り寄付者には知らされない。

観光客は寄付に応じる人とそうでない人に分かれる。なかには不快に思う人もいる。三〇元（子供と学生は半額）の切符を買って景区に入場したにもかかわらず、行く先々の鼓楼や風雨橋で待ち構えている村人から繰り返し寄付を求められ、気分を害したという日本人観光客の声を耳にした。

寄付した観光客のほとんどは二度と現地を訪れることはないため、自分の名前が石碑や木の板に刻まれたどうかを確かめる機会はない。それを知ってか、程陽八寨の某村の風雨橋に観光客がよせた寄付金の一部を係員の男が着服するという事件が起こった。現地を再び訪れた観光客が、自分の名が記されていない旨を指摘したことから、その男の不正が発覚した。

観光客からの寄付が比較的多いのは程陽橋に近い馬鞍寨、平寨、岩寨、大寨の鼓楼と風雨橋である（ただし東寨鼓楼と平寨鼓楼では観光客への募金活動は行っていない）。程陽橋から比較的遠い坪坦、吉昌、坪鋪の各寨の鼓楼はともに観光客に対する募金活動を始めたが、各村まで足をのばす観光客の数が非常に少ないため、吉昌、坪鋪では現在それをやめてしまっている。このように程陽八寨のなかでも程陽橋から遠い村々は観光客からの寄付金獲得においてきわめて不利である。

次に紹介するのは、観光を意識して鼓楼の建設儀礼の日取りを選定した事例である。

〔事例2〕 程陽八寨の岩寨では二〇〇六年に新たな鼓楼を建設した。鼓楼は一五層、高さ二三メートル、面積三〇〇平方メートルの巨大なものである。建設費用四〇万元のうち二五万元を岩寨の人々が出しあって自発的に建設した。観光の項目を増やすことと、観光文化活動を豊富にすることを意識したものでもあった。[9]

重要なのは、岩寨新鼓楼の建築儀礼が五一と国慶節の黄金週にあわせて挙行されたことである。地元では鼓楼や風雨橋などの公共建築物を建設する際には、柱たて、棟上げ、竣工のときに儀礼を行う。この鼓楼の棟上げの儀礼は五月五日（旧暦四月初八）に、竣工記念式典は一〇月三日（旧暦八月一二日）に行われた。それは観光客に、滅多にみることができない建築儀礼やそれに付随する地元のハレの日の活動に参観する機会を与え、黄金週の観光イベント

に彩りをそえようという主旨によるものだったという解釈がなりたつかもしれない。

しかし、そうした解釈だけでは不十分であろう。地元の習慣では、鼓楼の棟上げの儀礼や竣工記念式典の際に、鼓楼を建てる村が近隣の村々を招待することがよくある。招待された村の人々は寄付金を持参するのが普通である。儀礼終了後にホストの村はゲストの人々を招いて大規模な宴会（百家宴）を行う。それは屋外で行われることが多い。筆者が参加した五月五日当日は、外国人を含む観光客が数多く現場を訪れ、儀礼を参観し、写真やビデオを撮影した。儀礼終了後に鼓楼周辺の屋外で開かれた百家宴には、観光客も地元の人々とともに参加した。

ここで見逃してはならないのは、観光客が建築儀礼および百家宴に参加するには条件がつけられていたことである。鼓楼に寄付金を出すか、建設現場への入場料二〇元を支払うかであった。鼓楼の建設現場の入り口にはその旨を記した観光客向けの注意書きが、岩寨の関係者によって貼られていた。

また一〇月三日の新鼓楼竣工典礼でも同様に観光客が儀礼に参加し、終了後行われた百家宴にも参加した［諶・梁 二〇〇六b］。諶・梁［二〇〇六b］は触れていないが、筆者が後日確認したところによると、この時も百家宴への参加希望者は、鼓楼に一〇元以上寄付しなければならないという旨の注意書きが現場に貼られていた。

岩寨鼓楼が黄金週を選んで建築儀礼を行った背景には、観光客が最も多い時期にあわせて建築儀礼を挙行することにより、鼓楼建築の費用をより多く調達しようというねらいがあると思われる。ここで考慮しなければならないのは、以下に述べる地元の習慣である。建築儀礼を行う日と時間は、専門家に頼んで良い日、良い時刻を旧暦にもとづき入念に選んでもらわなければならない。素人がみだりに日時を設定するわけにはいかないのである。それを踏まえると、ここで検討すべきは、二〇〇六年五月五日と一〇月三日の両日が、果たして建築儀礼を行うにほんとうに「良い日」であったのかどうかという問題である。良い日が黄金週の期間とたまたま重なったということなのか。それとも、重なっていなかったのにもかかわらず、習慣を曲げて建築儀礼を挙行したのか。もし後者であれば、自分たちの習慣と観光による利益の、どちらを地元民が優先させるかという問題について理解するうえで重要なポイントとなる。残念ながら現時点では筆者は判断材料を持ちあわせていない。今後の検討課題としたい。

以上、事例1と事例2は地元の人々と観光客の関係にかかわるものであった。観光客に対して寄付を募ることを観光客側が快く思わない場合もあるが、村にやってくる観光客が比較的多い程陽橋近辺の村々にとっては、鼓楼や風雨

橋の建設・修理の資金を以前より多く獲得できるようになったといえよう。

次に紹介する事例は観光開発における、地元住民と国家・政府とのあいだに存在する問題を示唆するものである。二〇〇三年に馬鞍鼓楼のそばに新しい劇の舞台が建設された。舞台の傍らに据えられた石碑に刻まれた碑文の内容を簡単に紹介することにより、その問題について明らかにしたい。

〔事例3〕 馬鞍寨の舞台は一九八〇年代に建設されたが、当時は杉の木が不足していたので柱や梁も雑木で作った。そのためほどなく梁は曲がり、柱が腐るなどの現象があらわれた。二〇〇三年の初めに一人の広西壮族自治区のリーダーがこの現象をみて、貧困者補助プロジェクトから資金を出して建てなおすように指示し、あわせて林渓郷の人民代表大会主席がその責任を負うことになった。

村人にとって最大の心配は新しい舞台の所有権であった。一部の村人は心配した。「自分たち自身が建てた舞台を自分たちで解体し、他人が資金を出した舞台を建設する。この舞台が永遠に馬鞍舞台であり続けると、誰が保証できようか」。そして程陽橋を例としてあげた。「程陽橋は我々の祖先が建造した。一九八四年に国家がお金を出して修理はしたもののひとつひとつの木、石、瓦は祖先が残してくれたものである。現在この橋は他人の（ための）金のなる木になってしまった」（傍点筆者）。

上述の問題に対し、村のリーダーたちは半年のあいだに大小あわせて二〇回余りの会議を開いたが、人々の考えをまとめることはできなかった。郷からは早く決定するようにと再三催促され、さもなければその資金は他の村にまわしてしまうと通告された。

二〇〇三年一一月八日、村では再度会議が開かれた。ある男が、村人に対して以下のような提言をした。「所有権の問題については政府を信用しようではないか。もし我々が意見をまとめなければ、その金はよその村にまわされてしまうではないか。みなの心配を取り除くために、新しい舞台を建設し終わってから、碑をたて序文を書き、永遠の証拠としよう」。彼の発言はみなの賛辞を得て、「古い舞台を解体し、新しい舞台を建設する」という方針がみなの統一した意見となり、のちに彼が碑の序文を書いた。

以上が碑文の概要である。この碑文は一見したところ観光とは無関係のようである。だが、傍点を付した部分に注目することによって、程陽の観光が抱えている重要な問題点がみえてくる。程陽景区の観光の目玉となっている程陽橋は、もともと地元の人々が資金、物資、労働力を出しあって建設したものである。一九八二年に国家級の重要保護文化財に指定された時点で程陽橋は国家が管理するもの

となってしまった。ところが一九八三年に程陽橋は洪水で倒壊してしまう。一九八四年の修理の際には国家文物局が三二万元を投入し修復にあたったばかりか、修復の担い手は地元の人々ではなく、関連する役所であった［三江侗族自治県文管所編 一九八八］。程陽橋は地元の人々の手を離れてしまったのである。いくら国家に移管されたとはいえ、もともと程陽橋は村々の先達が力をあわせて建造した共有財産だという意識が地元では非常に強い。程陽橋の先例があるからこそ、馬鞍寨の人々は新しい舞台の所有権の行方について危惧するのである。

また、程陽橋に限らず、程陽景区の主要な観光資源である鼓楼や風雨橋、舞台などの木造公共建築物はみな民間の人々が自前で建設してきたものである。それらは現在、程陽橋とともに観光資源となり、景区の経営団体はそれらをみにくる観光客から参観料を徴収するようになっている。しかし、先にみたようにその収益は地元民にはほとんど還元されてこなかったのである。

以上三つの事例において紹介した地元民の動きは、観光の収益が地元に十分に還元されないことに対する彼ら独自の対応であると解釈しておくのが妥当であろう。また、木造公共建築物に対する彼らの思いや意味づけについての考察なしには、彼らの対応の機微を知ることはできないということをここで強調しておきたい。

七　程陽景区のこれから
――社会主義新農村政策――

程陽景区が近い将来大きく変貌することはほぼ確実である。程陽八寨が柳州市社会主義新農村建設の試験村に指定されたからだ。二〇〇六年七月一三日にその起工式が行われた［諶・梁 二〇〇六a］。社会主義新農村とは韓国でかつて行われたセマウル運動を模して行われようとしている新たな農村開発政策である。

程陽八寨新農村では、柳州市委員会と政府を中心として、試験村へ巨額の資金を投入し基礎施設、産業発展、公共事業と村落整備を推進することが計画されている。具体的には道路を中心に、水道、ゴミ処理、火災防止施設など村落のインフラ整備を進め、集落を新しい姿に改造することをめざすものである［諶・梁 二〇〇六a］。二〇〇七年九月の時点では、平寨や岩寨の生活道路の改修工事が進んでいた。

新農村試験村への指定は、程陽景区における観光の産業化の今後を推測するうえでたいへん重要である。なぜなら観光開発も重視されているからである。柳州市は巨資を投じ、三年から五年のあいだに「程陽八寨旅遊景点」を全国第一の「トン族民族風情旅遊景点」、いや、国家級の著名

表4　程陽八寨の機能分担

行政村名	村　名	戸　数	人　口	分担する機能
平岩村	馬鞍寨	169	656	建築芸術センター
	平　寨	220	945	歌舞芸術センター
	平坦寨	211	925	民族体験センター
	岩　寨	215	975	トン族民家情縁[1]民宿区
程陽村	東　寨	172	778	憩い体験センター
	大　寨	538	2,322	グルメ買い物天国
平鋪村	吉昌寨	148	456	トン族生態王国
	平鋪寨	592	2,704	トン族大劇センター

注：1）この場合の「情縁」は男女の縁ではなく、人の縁という意味で使われていると考えられる。そうだとすれば、人の縁とはトン族の民宿の経営者であるトン族の人々と宿泊客との間の縁ということであろう。

出所：馬鞍鼓楼広場および平岩村民委員会の建物の外壁に掲示されている「旅遊機能布局規画図」「程陽八寨人口規模統計表」をもとに筆者が作成。

な風景区にしようというプランを持っている［梁 二〇〇六、王冉 二〇〇六］。

程陽八寨新農村計画のうち観光に関するものには、柳州市旅遊局が参画している。柳州市旅遊局はトン族の民族建築の保護と集落の発展を両立させるような計画の策定を、広西総合設計研究院に委託している［梁 二〇〇六］。計画は鼓楼、風雨橋、高床式建築などトン族の伝統文化の特色をもつ建築物を特に力をいれて保護しつつ、当地の集落景観、すなわち生活空間を観光のために改造することを強調する［孟 二〇〇六］。

さらに、地元の年中行事にあわせてイベントをたちあげ、当地特有の建築、飲食、歌舞、手工芸、演劇などを観光客に展示することによって、秀逸な観光ルートを作ろうと計画している［孟 二〇〇六］。

程陽八寨のそれぞれの村に、観光関連の諸機能を新たに付与することも計画されている（表4）。程陽橋に最も近い馬鞍寨は程陽八寨の中心として位置づけられ、程陽橋、馬鞍鼓楼、村門、涼亭、高床式建築物などを重点的に展示する、トン族建築芸術のセンターとなるように計画されている。三年から五年以内に、村内にはトン族の民宿、外国人を接待する賓館、特色ある商店、娯楽センターがそれぞれ複数建設される予定である。長さ一六〇メートルにおよぶショッピング回廊も作られるという。

ここで想起されるのは、さきほど触れた、観光のために生活空間が改変されてしまった冠小寨の事例である。この事例について若干補足しておこう。この村では、もともと菜園だった丘の上に鼓楼を移築して以来、今まで老人を中心とした男たちが集まる場所であった鼓楼から彼らの姿がみられなくなってしまった。彼らは、集落のなかにある三王廟のなかに集まるようになった。筆者がその理由を村人に尋ねたところ、丘の上まであがって行くのは高齢者にとっては難儀である。新しい鼓楼のなかは、夏は暑く、冬は寒い。だから行かなくなった、といった答えが返ってきた。新しい鼓楼は丘の上に家並みから離れてぽつんと建っている。鼓楼のなかが快適でなくなってしまった原因は、夏の強い日差しと冬の寒風に鼓楼がさらされるのを随分と防いでくれていた家並みから鼓楼が離されてしまったことにあると思われる。

鼓楼が移築された地点は観光開発の視点からみると望ましい場所なのかもしれない。だが、鼓楼を日々利用する生活者にとっては不便で快適でない場所なのである。冠小寨の新鼓楼の立地は他の集落と比してきわめて不自然である。周囲の村々をみまわしても、家並みから離れた高いところにわざわざ鼓楼が作られている例はない。鼓楼は本来集落内の家並みの中に建てられるものである。

冠小寨の新鼓楼の形態はたしかに伝統的なスタイルは保持している。しかし以上述べたように地元の人々の日常生活のコンテクストから大きく外れた場所に移築されてしまった。程陽八寨の集落景観を改善する際には伝統的な建築物を保護するべきであると、政府が委託した専門家たちはうたってはいるものの［孟 二〇〇六］、彼らが冠小寨の轍を踏まないという保証はない。忘れてならないのは、程陽景区はトン族の人々が日常生活を営む生活空間そのものであり、木造公共建築物もその一部であるということだ。

おわりに

本稿では三江侗族自治県の程陽景区の事例をとりあげ、民族観光の産業化の過程を粗描した。さらに木造公共建築物の事例をもとに、民族観光の産業化が地元のトン族の人々に与える影響、および彼らの観光客や観光を進める国家や政府に対する対応の一端について考察した。

地元の人々の文化や生活の側面を中心に、観光化された状態と観光が産業化された状態の違いを短く表現するとすれば、以下のようになるであろう。前者は観光の対象となったものの、観光の対象とされた人々の伝統文化、民族文化や日常生活あるいは生活空間に対してはほとんど手が加えられていない状態である。後者はそれらに対して、市場経済原理にもとづき直接あるいは間接的になんらかの手

が加えられた状態である。

程陽景区の場合、当初、観光の柱は程陽橋を代表とする木造公共建築物であった。後に観光の産業化が進むと、それを補うために、年中行事が選ばれ、それに観光商品としての価値を付加するためにさまざまな工夫が凝らされた。

中国大陸の場合、民族観光は地元民の貧困克服を目標にして進められることから容易に想像がつくように、観光の対象となる人々は元来資金力も弱く、観光のノウハウも知らない場合がほとんどである。程陽景区の場合は、地元の人々が自力で建設した木造公共建築物が観光資源として利用されながら、今まで観光による収益が直接的にはほとんど地元住民に還元されてこなかった。

鼓楼や風雨橋の修理・建設費用の寄付を観光客に求めるという地元の人々の行為は、そうした状況に対する打開策のひとつであると解釈できるであろう。地元の人々は観光客に対しては恒常的に寄付を募ったり、まとまった額の寄付金を得るチャンスである建築儀礼の日取りを観光客の数がピークに達する黄金週にあわせたりと工夫を凝らしている。鼓楼や風雨橋の修理・建設費用を村落内外の人々からの寄付でまかなうというのは、観光が産業化する以前からみられた現地の習慣である。地元の人々はその形態を少し変えたうえで寄付を求める対象を観光客へと拡大したのである。以上は、地元の人々と観光客のあいだの関係性に関する事例である。

その一方、地元の人々と観光開発を進める側の国家や政府との関係性も重要である。国家の重要保護文化財に指定されたことを契機に、程陽橋の所有権は国家に移管された。さらに程陽の観光が産業化されて以降、程陽橋は他人の金もうけの道具として使われるようになった。このような経緯があるため、地元の人々は木造公共建築物の所有権の問題に対してきわめて敏感になっている。

中国大陸の場合、観光開発は行政主導で行われることが多いため、しばしば地元の人々に対する強制力を伴う。程陽景区の場合も、観光開発は行政主導で行われ、条例の制定・施行を伴う。条例の規定によって観光開発は制度化され、地元の人々に対して、例えばセメントやレンガの家屋の新築の禁止および木造の外観への改装が強要されている。

さらに、二〇〇六年に社会主義新農村試験村に指定され、これから数年のあいだにもともと生活の場であった村落空間が観光開発によって激変するのはまず間違いない状況になった。先行する冠小鼓楼の事例が示すのは、いくら木造公共建築物の形態が保存されるといっても、必ずしも地元民の生活感覚が考慮・優先されるとは限らないということである。

最後に新たな動向をひとつ補っておこう。程陽景区を経

営する三江県程陽橋景区旅遊開発有限責任公司は、二〇〇七年一一月二七日付で程陽八寨の各村に通告を出した。その骨子は、(1)程陽(橋)景区の観光管理を強化し、程陽八寨の村民が観光開発において収益を得ることができるように、程陽八寨旅遊管理委員会をたちあげる。(2)委員会の委員は全部で一一人、そのうち大寨、坪鋪寨から各二名、残りの六つの寨から各一名、そして公司から一名出す、というものである。この通告は、地元住民が今後、程陽八寨の観光開発にコミットし、正当な利益の分配を得るための道筋を開くものとなる可能性がある。こうした新たな動きのなか、今後、地元住民たちは観光開発において経済的な利益をほんとうに享受していくことができるのであろうか。また、地元の人々のあいだで「勝ち組」と「負け組」に分化していくのであろうか。今後注目に値する。

以上はいずれも重要な事柄であるが、筆者が特に注視したいのは、政府やそのアドバイザーたちが掲げる観光開発の論理と、地元民がもつ文化や生活に根ざした感覚、この両者がこれから折り合いをつけていくことができるのだろうか、という問題である。政府の方針に庶民が表立って反対することが難しい国情において、行政主導の観光開発の論理に地元の人々は一方的に屈服させられてしまうのか、あるいはしたたかにたちまわっていくことができるのであろうか。今後の程陽景区の観光開発の動向と地元住民の対応の双方を注視していく必要がある。

注

〈1〉 一九六一年に第一次全国重点文物保護単位として一八〇件が、一九八二年に第二次全国重点文物保護単位として程陽橋を含む六二件が指定された。一九八二年に指定されたもののなかには、四川省の都江堰や上海の豫園など全国的に著名なものが含まれている。

〈2〉 その後、貴州省従江県の増沖鼓楼(第三次、一九八八年)、湖南省通道侗族自治県の芋頭侗寨古建築群、広西壮族自治区三江侗族自治県の岜団風雨橋、貴州省黎平県の地坪風雨橋(第五次、二〇〇一年)、三江県の馬胖鼓楼、通道県の坪坦風雨橋(第六次、二〇〇六年)が相次いで指定された。

〈3〉 金秀瑤族自治県、融水苗族自治県、龍勝各族自治県も同時に対外開放された。少数民族の住む自治県が早い時期に対外開放された背景には、少数民族地帯を観光によって発展させようとするねらいがあったと推測される。

〈4〉 普済橋内部に設置された石碑に刻まれている「程陽普済橋維修工程協議書」による。

〈5〉 この統計の観光客数は三江県内に宿泊した場合のみカウントされたものである[侯 一九九六:四三]。

〈6〉 二〇〇六年になってから、ようやく家屋の外壁のセメントやレンガが露出している部分に木の板を貼って隠す工

事が行われるようになった。

〈7〉ここで紹介する各黄金週イベントおよび程陽八寨冬至節の内容は、現地および県城に掲示してあったプログラムに依拠している。うち筆者が実際に参加できたのは、五一黄金週の一部の行事のみである。

〈8〉さらに以前は正月初三に行われていた［三江侗族自治県民族事務委員会編 一九八九：七八］。

〈9〉岩寨鼓楼建築現場に掲示してあった二〇〇六年元月一五日づけの「致献愛心者的一封信」（愛の心をささげる人あての書簡）の一節。岩寨屯の老人協会はこの書簡で、岩寨鼓楼の建設資金の寄付を各界の人々に向かって呼びかけている。

参考文献

〈日本語〉

兼重努　一九九八　「エスニック・シンボルの創成――西南中国の少数民族トン族の事例から」『東南アジア研究』三五巻四号、一三二―一五二頁。

兼重努　二〇〇〇　「老人たちが再生させた橋修理――中国の少数民族トン族の民間公益活動における近所づきあい」福井勝義編『講座 人間と環境』第八巻 近所づきあいの風景――つながりを再考する、昭和堂、一九〇―二一三頁。

兼重努　二〇〇五a　「トン――民族一体化の動きと民族内部の多様性」末成道男・曽士才編『世界の先住民族――ファースト・ピープルズの現在』〇一 東アジア、明石書店、三三三―三五一頁。

兼重努　二〇〇五b　「国家政策と民族文化――トン族の鼓楼・風雨橋を中心に」科学研究費研究成果報告書（研究代表：山路勝彦、課題番号一四四〇一〇一七）『中国少数民族のエスニック・アイデンティティの人類学的研究』六―二四頁。

曽士才　一九九八　「中国のエスニック・ツーリズム――少数民族の若者たちと民族文化」『中国21』Vol・3、四三―六八頁。

〈中国語〉

諶胎照・梁克川　二〇〇六a　「〝程陽八寨〟成柳州新農村試点」『広西日報』二〇〇六年七月一七日。

諶胎照・梁克川　二〇〇六b　「三江侗郷風情引来万余遊客喝彩」『広西日報』二〇〇六年一〇月六日。

侯蕾　一九九六　「搞好交通、是三江発展旅遊業的関鍵」『風雨橋』一九九六年第一期、四三―四四頁。

黄海珠　二〇〇七　『民族旅遊村寨建設研究』中央民族大学博士論文。

蒋林　二〇〇四　「程陽橋花山岩画古霊渠三大景区〝申遺〟勝算幾何」『広西日報』二〇〇四年九月二〇日。

李凱・楊志剛　二〇〇五　「黎平機場正式通航」『貴州日報』二〇〇五年一一月七日。

孟萍　二〇〇六　「柳州探討古村古鎮保護和開発」『中国旅遊報』二〇〇六年一一月二七日。

潘善環　二〇〇五『侗族文化旅遊開発利用研究――以広西三江県為例』広西師範大学修士論文。
彭卿雲・劉煒ほか編　一九八九『全国重点文物大全』中国旅遊出版社。
三江　二〇〇七「三江〝侗味〟旅遊客源旺」『広西日報』二〇〇七年六月二三日。
三江侗族自治県国土資源局・三江侗族自治県地方誌弁公室編　二〇〇六『三江侗族自治県土地誌』香港展望出版社。
三江侗族自治県旅遊局　二〇〇二「三江県旅遊業迅猛勃発展」『計劃与市場探索』二〇〇二年第一二期、四三－四四頁。
三江侗族自治県民族事務委員会編　一九八九『三江侗族自治県民族誌』広西人民出版社。
三江侗族自治県文管所編　一九八八『程陽橋史料』。
王冉　二〇〇六「広西侗族自治県後発優勢源於特色開発」『今日信息報』二〇〇六年一〇月一六日。
王四西主編　一九九二『三江四十年』広西民族出版社。
無署名記事「三江〝侗味〟旅遊客源旺」『広西日報』二〇〇七年六月二三日。
楊梅　二〇〇一「推出品牌優勢――増設観光景点旅遊成為三江経済新〝売点〟」『広西日報』二〇〇一年四月六日。
楊強・孟萍　二〇〇七「三江打造中華侗文化体験之都」『中国旅遊報』二〇〇七年一月三一日。
〈ウェブサイト〉
中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館 http://www.ichchina.cn/（二〇〇七年一二月取得）
梁克川　二〇〇六「三江県新農村建設試点進展順利」http://www.gxagri.gov.cn/2006/0913/154037-1.html（二〇〇七年一二月取得）
梁克川　二〇〇七「生態遊成為侗郷旅遊〝大動力〟」http://cyq.gov.cn/html/20077171681 3-1.html（二〇〇七年一二月取得）